

# 『外敵』の時代から『内なる乱れ』の時代へ

現場で感じてきた23年の変遷

そういえば最近、FIPにかかる子が多い気がする

先日ふと「最近FIPにかかる子が多い気がする」と思い、情報を整理してみました。  
調べるほどに見えてきたのは、単なる病気の話ではなく、時代の変化でした。

私が開業した20数年前と現在を対比すると、その変容がよりはっきり見えてきます。  
現場で感じてきた変化を、調べて分かったことと合わせてまとめたいと思います。

## 20年前の福岡、パルボとの戦い

ふと最近、自分の中の「肌感覚」の変化に気づくことがあります。

20数年前、私はペットシッターとして活動しながら、同時に野良猫たちの保護活動に明け暮れていました。当時、私たちが最も恐っていたのは パルボウイルス(猫汎白血球減少症)でした。

当時の福岡でも、獣医師の先生方と「今、あのエリアでパルボが出ている」という緊迫した情報交換が割と日常的に行われていました。

あの独特的な空気感、急変する子猫たちの姿。

当時の私にとってパルボは、外からやってくる圧倒的な「強敵」そのものでした。

今振り返ると、あの頃の保護現場はまさに感染症という“外敵”と戦う場だったのだと思います。

### ※補足:パルボが「なくなった」わけではありません

ここで誤解のないように補足しておきたいことがあります。

現在、日常の現場でパルボという言葉を耳にする機会は大きく減りました。しかし、これはパルボが消滅したという意味ではありません。現在でも発生は報告されていますし、特にワクチン未接種の子猫にとっては、今もなお非常に警戒すべき感染症です。

ただ、現場で長く関わってきた体感として大きく変わったのは、かつてのような地域単位での広がり(面での流行)を感じる機会が減り、現在は個別的・散発的な発症(点での発生)として目にすることが多くなった、という点です。

これは獣医療の進歩、ワクチン接種の普及、室内飼育の一般化など、社会全体の変化の影響が大きいと考えられます。

## 現場で得た、知識以上の「真実」

保護活動は、実に多くのことを教えてくれました。散財もしましたし、身を削るような思いもしました。

けれどその時間は、動物への接し方や病気の知識、そして命の尊厳について一気に引き上げてくれた貴重な時間でした。

現在、ペットシッターとしてご家庭にお邪魔する中で、パルボという言葉を耳にすることは激減しました。これは偶然ではありません。社会全体の変化が重なった結果です。

- 獣医療の発展
- ワクチン接種の定着
- 室内飼育の一般化
- SNS普及による保護意識の向上
- 地道な保護活動による野良猫数の減少

こうした社会全体の変化が重なり、パルボは「日常的な脅威」から「過去の脅威」へと移行していきつつあります。つまりこれは、単なる病気の話ではなく、社会の成熟の一つの側面でもあると感じています。

## 15年前、ある知人の「人間の医師」が抱いた恐怖

しかし、その静寂と入れ替わるように存在感を増してきたのが、FIP(猫伝染性腹膜炎)でした。

15年ほど前、ある熱心な保護活動家でもあった知人の人間の医師のもとで、猫がFIPを発症したときのことです。

医学のプロであるその方でさえ、当時はFIPの子を厳重に隔離していました。それほどまでに当時のFIPは正体が掴めず、一度出れば「全滅するかもしれない」と恐れられていた病気でした。

今の知識から見ると過剰に思えるかもしれません。しかし当時は、それが“合理的な対処法”だったのです。

## 知識のアップデートと、私の「嗅覚」

それから10年余り。FIPの解像度は劇的に上がりました。

現在では、FIPは、外から感染する敵ではなく、体内での変異によって発症する病気という理解が一般的になりました。

ここで、大きな転換が起きています。

かつての感染症は「外から侵入する敵」でした。しかしFIPは、体の内側で起こる出来事です。

では、なぜ今これほど目立つのでしょうか。

保護現場と家庭現場の両方を長年見てきた私の「嗅覚」は、一つの可能性を感じています。

それは 現代の猫たちが抱えるストレス です。

かつてのような外敵は減りました。

しかし現代の猫たちは、

- 密閉された室内環境
- 複雑な多頭飼育
- 人間の生活リズムの変化
- 共働き・長時間不在
- 情報過多による飼育の複雑化

という、別の環境に置かれています。

感染症が減った代わりに、慢性的な負荷の中で生きる時代になったとも言えます。  
その「内なる乱れ」が、本来おとなしいはずのウイルスを牙をむく存在へ変えてしまう。

そう考えると、今起きている変化が一本の線でつながります。

**FIPは「増えた」のか？それとも「見えるようになった」のか？**

ここで一度、冷静に立ち止まる必要があります。

私自身も長年「FIPが増えた」という感覚を持っていました。けれど、現在の研究の流れを追うほど、その表現は正確ではないと感じるようになりました。

結論から言えば、

**FIPは急増したというより、診断・研究・治療の進歩によって“解像度が上がった病気”と考える方が自然です。**

この変化は、ここ10～15年の間に起きたいくつかの大きなブレイクスルーが重なった結果です。

## ① 遺伝子解析が「感染症の正体」をはっきりさせた

15年以上前から、FIPは「猫コロナウイルスの突然変異」と言わっていました。このことはペットシッターである私も知っていました。

しかし当時は、まだ決定的な証明が不足していました。

- FIPは感染するのか？
- 同居猫はなぜ発症しないのか？
- 別の“FIPウイルス”が存在するのではないか？

この曖昧さが、恐怖を大きくしていました。

その状況を大きく変えたのが、2000年代後半以降に急速に進んだPCR検査と遺伝子解析の進歩です。

研究により、現在では次の理解が定着しています。

- ・多くの猫が腸内に猫コロナウイルスを持っている
- ・その一部が体内で変異する
- ・変異ウイルスが免疫細胞(マクロファージ)に感染できるようになる
- ・ここでFIPが成立する

つまりFIPは、外から侵入する病気ではなく、体内で成立する病気という理解が確立しました。

これはFIPという病気の大きな転換点でした。

## ② 治療薬の登場が研究を一気に加速させた

FIP理解の最大の転機は、2019年前後に訪れます。抗ウイルス薬(GS-441524)の登場です。

それまでFIPは「ほぼ100%致死」と言わされてきました。

しかし現在は「治療成功率80～90%」という報告も珍しくありません。この変化は、医学研究の世界では非常に大きな意味を持ちます。

治療法がない病気は研究が進みにくい。治療可能性が生まれると、研究が爆発的に増える。

FIPはまさにこの転換点を迎えました。

治療できる病気になったことで、世界中で研究・データ・症例が急増し、理解が一気に進んだのです。

## ③ 診断が可能になり「謎の死」が減った

かつてのFIP診断は非常に曖昧でした。

- ・疑い
- ・可能性が高い
- ・FIPかもしれない

確定診断が難しい病気だったのです。

しかし現在は、

- 腹水・胸水のPCR検査
- 免疫染色
- 組織検査

などにより、体内の免疫細胞内に存在するコロナウイルスを証明できるようになりました。

これは大きな変化です。

昔：原因不明の死

今：FIPと診断

つまり、病気が増えたというより、見えるようになったという側面が非常に大きいのです。

## それでもFIPが目立つ理由

ここまで読むと「ではFIPは増えていないの？」という疑問が生まれると思います。

答えは、少し複雑です。

FIPは”見えるようになった+発症要因が増えた”と考えられます。

- ・室内多頭飼育の増加
- ・猫の寿命の延長
- ・生活環境の変化

現代の猫たちは、昔とは違う環境で生きてています。

感染症の脅威が減った時代に、代わりに浮かび上がってきたのが

免疫・炎症・慢性的ストレスと関係する病気なのかもしれません。

## FIPは「単一原因の病気」ではないという現在の理解

ここまで読むと、「では何に気をつければいいの？」と感じる方も多いと思います。

FIPは今も完全に解明された病気ではありません。しかし近年の研究により、発症の仕組みについてはかなり整理されてきました。

現在もっとも一般的に受け入れられている考え方は、FIPはひとつの原因で起きる病気ではないというものです。

発症には、主に次の3つが重なると考えられています。

## ① ほとんどの猫が持つ「猫コロナウイルス」

まず前提として、猫の多くは腸内に猫コロナウイルスを持っています。これは珍しいことではありません。

そして、このウイルスを持っている猫の大半は、一生発症しません。

FIPは「感染したから発症する病気」ではない、という点が非常に重要です。

## ② 体質(免疫反応の個体差)

同じ環境で暮らし、同じウイルスを持っていても、発症する猫としない猫がいます。

研究では、

- ・同腹子で複数発症
- ・特定の血統での発症例
- ・純血種でやや多い傾向

などが報告されており、免疫反応の個体差(遺伝的素因)が関係すると考えられています。

つまりFIPは、体質の影響も受ける病気です。

## ③ 環境要因・ストレス

さらに重要なのが、環境要因です。

FIPは免疫の過剰反応が関わる病気であるため、強いストレスや環境変化が発症の引き金になり得ると考えられています。

発症が多く報告される環境には共通点があります。

- ・多頭飼育環境
- ・繁殖施設やシェルター
- ・子猫期
- ・生活環境の大きな変化

ここで誤解してほしくないのは、「環境が悪いから発症する」という単純な話ではないという点です。

現在は動物愛護法の整備により、繁殖施設や販売業者には飼養基準が設けられ、定期的な立ち入り検査も行われています。環境は確実に改善されています。

それでもFIPが存在するのは、この病気が衛生状態だけで説明できる病気ではないからです。

## だからこそ言えること

FIPは

- ・ウイルス
- ・体質
- ・環境

この3つが重なったときに発症すると考えられています。

つまり特定の誰かの責任で起きる病気ではないということでもあります。

「現代社会で共に生きる上での、不可避な変化」ともいえます。

そして同時に、日々の生活環境やストレスの少ない暮らししが大切な要素のひとつであることも見えてきています。

## 社会の変化は「病気の顔」を変える

ここで見えてくるのは、とても大きな流れです。

昔：外敵との戦い（感染症）

今：内側のバランスとの戦い（慢性・免疫・炎症）

これは人間の医療とも驚くほどよく似ています。

社会が安全で清潔になるほど、問題は「外」から「内」へ移動していく。

猫たちの病気の変化は、人間社会の変化の鏡のようにも見えます。これは大袈裟な解釈ではないように私には思えます。

「病気の顔」は社会の変化で変わるので。

## おわりに：今の私だから伝えられること

病気の専門家は獣医師です。これは揺るぎません。

けれど、20数年前の緊迫した保護現場から、現代の静かな家庭までを見続けてきた一人として、確信していることがあります。

時代が変われば、守り方も変わる。

外敵と戦う時代から、内側のバランスを守る時代へ。

感染症が減ったことは、人と猫が安全な社会にたどり着いた証でもあります。  
そして今、私たちは次の段階に進んでいます。

これからの時代の予防は、ワクチンだけでは完結しません。

- ・安心できる環境
- ・安定した暮らし
- ・ストレスの少ない関係性

そうした日常そのものが、猫たちの免疫を支える基盤になっていくのだと思います。

病気の顔は、社会の変化とともに変わります。  
だからこそ、守り方もまた変わっていく。

私たちは今、その変化の途中にいます。

作成:ペットシッターMojo Mojo